

わり方について、センターの助言を求めるなど、一人ひとりの子供を大事にする姿勢で、本人と触れ合ったので、学校に早くとけこませることができたものと考えられる。

7-(2) 神経症的登校拒否 — Aタイプ—

1. はじめに

このタイプは「優等生の息切れ型」ともいい、親からの心理的独立の挫折や自己内葛藤^{ごせつ}に起因するものが多い。

一般に両親は知的に高く、子供に対する期待が大きい。父親はまじめでおとなしい性格であるが、母親はしっかりしており支配的である。両親、ことに母親の期待をとり入れ、よくしつけられた、いわゆる「よい子」として育った子供が多い。つまり、幼児期の反抗期にもそれらしい反抗もなく、いたずらやケンカなどの自己主張もみられず、親の枠組みの中にはめこまれ、自主性の発達が妨げられて、思春期まで、いわゆる「いい子」の評価を受けてきた子供である。

思春期に入り、ある程度自我が成長してきて、親の枠に反発し、精神的に親から独立しようとするが、現実の自己が弱いためうまくいかない。また、学校の友達集団の中で、その自己の弱さに気づき、自己内葛藤を起し、登校を拒否する。

性格行動の特徴として、神経質・几帳面であり、完全欲が強く自分に対する要求水準が高い。まじめで成績はよいが社会性に乏しく、対人不安が強く、孤独であるなどをあげることができる。また、中学から高校の思春期にかけて、急性に発生する事が多く、罪悪感が強いために閉じこもりが強い。

援助指導にあたっては、今まできちんとしつけられ、ムダや失敗の経験が少なかった。優等生的な性格が挫折の原因であったことを反省させ、子供の自主性を育てるべく、本人にまかせ^{まかせ}ることを中心に、今までの親のかかわり方の改善を図ることが大切である。

2. 事例

- (1) 主訴 登校拒否 — Aタイプ
- (2) 対象 N・K 高校1年女子 15歳
- (3) 問題の概要

昭和56年6月20日来所

中学校までは成績はトップクラスであった。高校に入学して5月ごろから生理が不順になり、体育の授業では、運動するのが下手なので、みんなに迷惑がかかるという見学することが多かった。また、数学の授業での緊張が強く、時々腹痛や頭痛を起し、養護教諭から薬をもらい飲んでいた。

自分の劣っている部分について、友達から何か言われるのではないかと不安になり、そのことを考えると学校に行けないという。朝、登校時になるとフトンの中で体をふるわせていた。両親は、子供にいかに対処したらよいか困惑し来所する。

(4) 資料・情報

① 生育歴

- ア. 胎生期・乳児期には特に問題はない。
- イ. 幼稚園では、素直でおとなしい子供であった。家でも親のききわけはよかった。
- ウ. 小学校4年で初潮をむかえ、乳房が大きいことを気にし、運動が嫌いになる。目立つことは好まず、わかっていても手をあげて発表できなかった。成績は上位であった。
- エ. 中学校入学後、勉強するたびに成績が向上し、常に首位を占めていた。自分から積極的に友達をつくることはしなかった。

② 家族構成及び家庭環境

- ア. 父：44歳…農業を営む。酒も飲まず真面目であるが、どこもなく弱い感じを与える。婿である。
- イ. 母：42歳…スーパーマーケットに勤務。職場や世間での評判はよく、しっかりものとおっている。
- ウ. 弟：13歳…姉と比べると学力は多少劣るが、外向的でスポーツを好む。
- エ. 祖母：68歳…母と同様口が達者で、近所からの評価は高い。